

君に10年恋してる

目次

君に10年恋してる

5

番外編 ダイヤモンドと変わらぬ愛

239

君に10年恋してる

プロローグ

「利音、俺、上司の娘さんと結婚することになった」

私——熊谷利音が、一年半付き合っている彼氏の鈴木祥太郎にそう言われたのは、六月のある日のことだった。

場所は、祥太郎の家。

いつものように、私が作った夕食を二人で食べていた。

付き合って一年も経つとデートに行くのも億劫で、このところ休日はこちらかの家に行き、レンタルしてきた映画のDVDでも見た後、夕食を食べて寝るというパターンが続いていた。

付き合い始めたころの情熱はなく、惰性で続く穏やかな日々。

いつもと変わらない日常——

少なくとも私は、そう思っていた。

それなのに、祥太郎は、突然、なんでもないことのようにそう告げたのだ。

「はあ……？」

私は思わず聞き返す。

彼が何を言っているのかまったく意味がわからない。

「上司って、野宮部長？」

頭が混乱して、とっさに尋ねてしまった。

そんなことを確認したところでどうしようもないのに。

それでも、声音だけは平静を装うことに成功した。

「よくわかったな」

祥太郎は少し驚いたような顔で答える。

なぜ驚くのだろうか。

私と祥太郎は、同じ会社に勤める同期だ。部署が違うとはいえ、彼が一番親しくしている上司くらいはわかる。

自分の彼氏の交友関係すら把握していない女だと思われていたのかと、ため息が出た。

「それで？」

私が先を促すと、祥太郎は、さも当然だというように告げる。

「あー、だからもうここには来ないでくれよ」

そのあまりにあっけらかんとした口調に安然となる。

これは、はたして別れ話なのだろうか。

私はなんとなくではあるが、祥太郎とは結婚するのかなと思っていた……私たちももう二十八歳だし、お互いの親と顔を合わせたことだってある。

でも、祥太郎にとってはどうも違つたらしい。

そうか、私は捨てられるのか……

現実感がない。

私はふらふらと立ち上がってキッチンに向かった。

洗い場に置いてあった大きめのコップに水道水を汲んで、祥太郎を振り返る。

彼の背中には、いつもと変わらずリラックスしているように見える。こちらを見もしない。

この人——いや、もうこいつでいい。

こいつは、私がキッチンに向かったことに危機感を覚えないのか？

普通こんな別れ話をしたら、刺される覚悟ぐらいするだろう。

もちろん、私はそんなことしない。

けれど、ふつふつと怒りが湧き上がってきたのも事実。

私はコップを持ったまま、祥太郎にそつと忍び寄る。そして背後に立つて、彼の頭に水をかけた。

「うわあ!? な、何すんだよ!？」

彼は悲鳴を上げながら私を睨む。

「は？ 何もされないで済むと思つたわけ？ バカなの？」

「なっ」

「ああ、ごめん。バカだったね」

私はポタポタと水滴を落とす祥太郎を見て、挑発するように笑った。

子どものように泣き喚くなんてまねはしないけれど、怒りを我慢できるほど大人じゃない。

彼は私のことをなんだと思つていたのか。

結婚までの繋ぎ？ 代えの利くアクセサリー？

いずれにしても「もう来ないで」の一言で終わらせる程度の関係だ。

祥太郎は顔を赤くして口をパクパクさせている。

言いたいことがあるのだろうが、言葉が出て来ないようだ。

そんな彼を横目に、私は帰り支度を始める。

途中だった夕食は生ゴミの袋に捨て、私専用の茶碗や箸を不燃ゴミの袋につめる。彼のクロゼットに入れてあった下着や歯ブラシなんかの日常品も全部まとめてゴミ袋だ。そして最後に靴の中に入っていたこの部屋の合鍵を祥太郎に投げつけた。

濡れた身体を拭きもせず呆然としていた祥太郎は、とつさに受け取ろうとするけれど、動揺のせいか、受けとめ損ねた。

鍵が彼の手の上で跳ねて、スプー皿の中へちゃぷんと音を立てながら沈む。

「私の物は捨てていいから。私の部屋にあるあんたの物も全部捨てる」

玄関で赤いパンプスを履き、最後に振り返る。

「結婚と同時にストレスで禿^はげてしまえ」

ドアを開けると、今度こそ振り返らず部屋を出る。

涙は出なかった。

後から考えると、別れたくないと思^{すが}えばよかったのかもしれないが、その時はそんなことまったく思いもしなかった。

私も祥太郎にたいして好きだと思^う感情をとくに失っていたのだ。

それでも、一年半も付き合っていたのにたった一言で捨てられてしまう自分の存在が悲しく、悔しかった。

こうして私は、一年半付き合った彼氏と別れたのである。

第一章

祥太郎と別れて二ヶ月が過ぎた八月。

私は高校の同窓会に参加するため、都内にある有名なホテルへ向かっていた。

実はあまり、出席する気はなかった。

高校時代からの友人である長浜綾香^{ながはまあやか}からしつこく誘われたので、出席の返事はしたもの、仕事を理由に欠席するつもりだったのだ。

就職してから今まで二回、同窓会があつたが、私はすべてそれを理由に欠席している。だけど、今年はその手は使えない。

何せ私は現在、無職だから！

それというのも、元彼である祥太郎のせいだ。

どうもあいつは、私と同じ職場で働いているのが嫌だったらしい。私だって嫌だが我慢していたのに、よりによってあいつは会社で私がストーカーだと言いつらした。それだけならまだしも、ことあるごとに嫌がらせまでしてきたので、私はちよつとしたトラブルを起こしてしまったのだ。そんなことが続き、私は勢いで会社を辞めた。

ありがたいことに次の職場は決まっている。

ただ、転職先での勤務は、九月から。それまでの間、毎日自宅でももしないでいると、後ろ向きなことばかり考えてしまうので、気晴らしも兼ねて同窓会に参加することにしたのだ。

何かやることがあると気持ちが切りかわる。

久しぶりに髪を切ったり、この日のために服を新調したりした。

不思議なもので、それだけで気持ちは浮上してくれる。我ながら単純だ。

綾香と約束した時間に少し遅れて、ホテルの入口に着いた。

「利音。こっちこっち！」

「綾香！」

ホテルの前に立つ綾香をみつめて、小走りに駆け寄る。

彼女は可愛い女性だ。特に大きな目と小さく柔らかそうな唇に男性は底欲をそそられるらしい。今日も、可愛いワンプイスを着て手を振っている。

「ごめん、遅れた」

私は、両手を合わせ綾香に謝る。

「本当、相変わらずの遅刻常習犯ね。そんなんの仕事大丈夫なわけ？」

綾香は、その可愛い顔に似合わず、言いたいことをズバズバ言う。

「仕事の時は遅刻しないわよ……」

ずっとホテルの前に居るわけにもいかないので、私たちは会場へ向かうことにした。

同窓会の会場は、ホテルの最上階にあるバンケットホールだ。そこから都内の風景を一望できるらしい。

私たちはエレベーターに乗り込み二十八階のボタンを押す。

お互いの今日の服についておしゃべりしながらエレベーターを降りると、ホールの前に受付があった。

会場は軽く二百人ぐらい入れる広さがある。どうやら同窓会は立食スタイルらしい。

いやはや、なんと大規模な同窓会だろうか。

「イケメン生徒会長どこにいるかな」

綾香が会場をキョロキョロと見渡す。

「綾香、会長の顔好きだったもんね」

私は、そんな綾香に少しあきれつつも、彼女らしいと思った。

「そう、顔は凄い好みだったのよ」

今回の同窓会は同学年合同で、幹事は元生徒会のメンバー。イケメンの元生徒会長もちろん出席するに違いない。

生徒会長のファンだった綾香はそれを楽しみに参加しているふしもある。

私は、生徒会長には興味がなかったもので、他に親しかった友人が来ていないかと探し始めた。ホールで談笑している数グループの中に知っている顔を見つける。

思わず、懐かしいなあと声に出していた。

「あんだ、前二回の同窓会には参加してなかったもんね」

「う、悪かったわよ。仕事忙しかったし」

「はいはい、言いわけは聞き飽きた」

綾香と私は仲が良かった友人たちのグループを見つけ、そちらに近寄った。

開始から十五分も過ぎれば、みんなそれぞれグループで昔話に花を咲かせる。

私も友人たちとの久々の再会に気分を良くして、お酒をがばがば飲んだ。

あー、めんどくさがらないで来てよかったー。

賑やかな雰囲気にも私の気分も高揚する。

会も半ばを過ぎかなり盛り上がってきた頃、遅れて誰か来たらしく周りが少しざわついた。

みんなにつられるように私もホールの入口に目を向ける。

誰あの人！

受付の付近に見知らぬ男性が立っていた。

数人の女性から熱い視線を受けているその男性は、身長は一八〇センチぐらい。長めの前髪を後ろに流し、サイドと襟足はすっきりと整えている。

体格もよく、スーツを脱いだら凄いんですっていう感じ。大人の色気が出ていて、とても同い年とは思えない。

たしかにみんながざわつくのもわかる。

「ねえ、ねえ。今入ってきたイケメン誰？ あんな人いたっけ？」

私は情報通で交友関係も広い綾香に尋ねた。

「狭山彰人だよ、三年生の時、隣のクラスだった。利音、知らなかったの？ あんだ、本当にイケメンに興味がないんだね」

「まったく覚えてない」

彼とは同じクラスになったことがない。接点もほとんどなかったもので、そんな彼の顔を私が覚えていなくても、しよやうがないと思う。

綾香は、狭山と二年生の時同じクラスだったらしく、詳しく彼のことを教えてくれた。

彼は高校の頃から高い身長、男前な顔立ち、高校生とは思えない色気のある低音ボイス。サッカー部に所属していて、三年の時は主将。加えて成績優秀。そんな少女マンガに出てくるようなハイスペックの持ち主として有名だったそう。

たしかに名前は聞いたことがあるような……

「綾香は興味がなかったの？」

イケメン好きな綾香の口から彼の名前を聞いた覚えがない気がする。それをを不思議に思い、尋

ねる。

「狭山はなー。どこか病^やんでそうなんだよねー。まあただの勘^{かん}だけど」

「ふうん？」

私は狭山の顔をもう一度よく見る。

彼の切れ長な目とクールな雰囲気^{ふんいき}がそう思わせるのかもしれない。

私はイケメンに興味^{きょうみ}がなかったし、他に好きな人がいたから狭山のことはあまり印象^{いんしやう}にない。けれど綾香の話^{はなし}を聞いて、私は彼と一度だけ話^{はな}したことがあるのを思い出した。

あれは、高校三年生の時。私が当時好きだった人に彼女^がができて、柄^{がら}にもなく落ち込んだ日のことだ。

悔しくて悲しくて、放課後^{はうかご}ずっと教室で泣いてた。

その時、偶然^{ぐぜん}教室の前を通りかかった男子^{なんし}がなぜか私に話しかけてきたのだ。

「大丈夫ですか？」

ほっといてくれればいいのに、声をかけてくるのがうつとうしくて、気持ちに余裕^{よゆう}のない私は声を荒らげた。

「関係ないんだからほっといて！」

キツと睨^{にら}んで言ったのに、彼は失恋^{しせつれん}なんてたいしたことじゃないから大丈夫だと笑った。その綺

麗^{れい}でモテそうな顔に腹が立った。

「貴方^{あなた}みたいにモテる人間に、私の気持ち^{きもち}がわかるわけないでしょ！」

そう言^いって、私はその男子^{なんし}に八つ当たりをしたのだ。

はつきりと思い出した。あの男子^{なんし}が狭山だ。あまりに自分勝手な振る舞^{まゐ}いが恥^{はにか}ずかしすぎて、私の中でなかったことにしてた。

狭山は、教室で一人俯^{うつむ}いている女子^{じよし}を気にかけてわざわざ声をかけてくれたのに、八つ当たりするなんて。

その上、そのことを記憶^{きおく}の彼方^{かなた}に追いやって、顔も忘れるなんて……どこまでも最低な女^めだな、私。

「利音？」

綾香に話しかけられて、我に返った。

「あ、ごめん。ちよつとボーっとしてた」

ぼんやりと狭山とのかを考^{かんが}えて反省^{はんしやう}していたら、いつの間にか閉会^{へいかい}の時間^{じかん}になっていた。

「二次会、行くでしょ？」

人でごったがえす会場の入口^{いりぐち}がすくの待ちながら綾香に問^とわれる。

「どうしよう……」

「かな」と、続くはずだった言葉を綾香は聞いてくれなかった。迫力のある微笑みを向けられ、有無を言わず手を掴まれる。

「はい、参加させていただきます」

無理にさからうことはせず、私は頷いた。

まあ、別に明日は日曜日で、特に予定があるわけではない。そもそも無職なので、明日が平日でも予定はないんだけどね。

せっかくだし、もう少しこの楽しい雰囲気の中にいよう。

帰ったら盛り上がった反動で嫌なことを思い出し、寂しくて泣き出してしまいそうだ。

元彼に未練があるわけではないのだが、一人で居るとどうしても気持ちが悪く塞いでしまう。

私は綾香の手を掴み返し、歩き出した。

「おーい、熊谷。お前一人で大丈夫か？」

「だーいじよぶ、だーいじよぶ！」

私は千鳥足になりながら、トイレに向かった。

隠れ家風のイタリアンバルでの二次会も楽しかった。時刻はすでに夜の十時をまわっている。

二次会は何グループかに分かれたため、このバルに居るのは二十人くらいだ。

いっぱい居すぎても全員と会話ができるわけではないし、一部屋に収まるぐらいの今の人数のほうが個人的にはありがたい。

もっとも全員一次会から飲み続けているので、大半は完璧な酔っ払いだ。少人数になったからといってまともに話ができているかは怪しい。かくいう私もかなり酔っていて……

トイレに行ったため少し落ち着いたけれど、なんとなく暑苦しい。

私は一度外の空気を吸おうと出入口へ向かった。

酔って身体がほてっているからか、少し肌寒い。人肌が恋しいなあ……と温もりを求めたくなった。

「うわっ」

物思いに耽りながら歩いていたら、思いっきり足を捻った。お酒のせいで足がよろけ、ふんばりがきかなかったのだ。

身体が傾き、転びそうになったところを誰かの手に支えられた。

私の腰を支えてくれる腕は太く力強い。

誰なのかと、振り向いた先に居たのは……

「さやま？」

一次会で注目の的になっていた狭山だった。あきれているのか、片眉を上げて不機嫌そうな顔を

している。

「ええ、狭山ですよ。たく、俺がいなかったら転んでましたよ。それに部屋はこつちじゃありませんよ」

「へへ、本当なんだ。敬語使うクセー」

私は支えてもらったお礼も言わず、狭山に絡む。

詳しくは知らないけど、狭山は敬語で話す癖があるのだそうだ。

男前のサッカー部主将なんて女友達が多くて軽そうなイメージがあるのに、品行方正な優等生。だからなのか、目立つ人なんか好きじゃない、というような女子ですら、狭山に熱い視線を送っていたと綾香が教えてくれた。

今もモテてるんだろーなー。

私は狭山の肩を軽く叩きながら笑った。

間近で見れば、その端正な顔立ちがわかる。鼻梁は高く、長い睫に切れ長な瞳。「病んでそう」という綾香の言葉を聞いたせいとか、どこか冷たそうな印象を受けた。

「ほら、戻りますよ」

狭山はため息をつく、私の指を掴んで自分の肩から下ろした。

「い、や」

「はあ？」

狭山は眉間に皺を寄せ、怪訝な顔をする。

それでも顔は綺麗なままだ。

腰に回っている狭山の腕が熱いような気がする。

スーッと越しにもわかる、筋肉がついた逞しい腕、そして厚い胸板。

その温もりが離れていくことがどうしようもなく寂しいのは、全部全部お酒のせいだ。

「外の空気、吸いに行くの……」

逃げるように店の廊下を歩き出せば、狭山が後ろからついてくる気配がした。

別についてなくても大丈夫なのに、そう思いながらも私は嬉しくなった。

誰かが心配してくれるのは、自分が一人じゃない証拠だと思うから。

お店の外に出て、出入口より少し左に立つと狭山が隣に並んだ。

私は身体をぐっと伸ばし、狭山のほうは見ずに前の道を見つめながら言う。

「狭山ってさ、人肌恋しくなったりすることある？」

「……突然なんですか？ 藪から棒に」

狭山のあきれた声に、私も自分は何を口走っているのだろうとおかしくなる。くすつと少し笑った。これも酔っているせいだ。

「夏の終わりってさ、なんだか寂しいなと思って。……寂しいんだ」

二十八歳にもなって子どもみたいなことを言っている。それでもこのぽつかりと空いた心の隙間

を埋めたかった。

他愛のない話のつもりだったのに、やけに擦れた声になってしまった。まるで本音が漏れたというように。

狭山からの返答は聞こえない。

だんだんと居たたまれなくなってきた、隣に居る狭山を見上げた。

店のライトに照らされて、狭山が眉間に皺を寄せているのがわかった。

「ごまかすように『なんてね。冗談だよ……』と言う前に、狭山の指が私の頬を擦り、唇を撫でた。その行為に思わず小さく「あつ……」と声を漏らす。

「男の前で寂しいなんて言う貴女が悪いんですよ」

狭山の目が細くなり、獲物を狙うように私を見つめる。

「いったん店に戻って荷物を取ってきます。貴女の鞆、どんなのですか？」

「え、……つとクリーム色の鞆。今着てるワンピースと同じオレンジ色のコサージュがついてる」

狭山の言葉に、私は素直に答えた。

「わかりました。俺が取ってきますから、此処にいてください。他の男にひっかけられても、ついて行ったらだめですよ。もし、待っていなかったらお仕置きですからね」

お仕置きとはいったい……

私はぼんやりと狭山の背中を見送った。

五分もしないうちに狭山は私の鞆を持って店を出てくる。鞆を受け取ろうとしたが、まるで人質だというみたいに返してくれない。かわりに狭山は私の腰に手を回し、歩くように促した。

綾香に何も言わずに出てきてしまった。後で連絡しておかないといけない。

二次会の会費は最初に支払っているので問題ないと思うけど、追加徴収があったらどうしよう。

そんな関係ないことばかりが頭の中を巡る。

狭山は途中でコンビニに寄った後、繁華街を抜けて近くのビジネスホテルへ入った。

ラブホテルではなかったことに少しホッとする。

狭山が受付でカードキーを受け取り、また私の腰に手を回してエレベーターに乗り込む。

なぜだか彼は私を離そうとしない。しかもちよつと強めに抱いてくるので苦しい。

私が逃げるとでも思っているのだろうか。

たしかにだんだん頭が冷えてくると、今の状況に戸惑いを感じ始めていた。

逃げ出したい気持ちがないわけではない。

でも、狭山の言うように「寂しい」と口に出したのは私だ。このまま誰もいない部屋に帰るのは嫌だった。

それに、お酒のせいで現実感がなかったとはいえ、狭山と二次会を脱け出すことの意味がわかっていなかったわけじゃない。私は彼の優しさを期待したのだ。

エレベーターの中で横に立つ狭山を見上げる。

やっぱイケメンだなーなんて再認識していると、私の視線に気づいた狭山が唇を寄せてきた。

「んんっ」

冷え始めていた頭が、また熱を持つ。

「欲しそうにしてみましたからね」

耳元で色気を含んだ声が響き、私は自分の腰がむずむずと動くのを感じた。

触れるだけのキスでこんなに反応してしまうのなら、深いキスをされたらどうなってしまうのだろうか。

エレベーターを降りて、部屋に入った瞬間――

身体を壁に押しつけられて唇を塞がれた。

猛獣に食べられているような錯覚に陥るほどに、荒々しい口付け。すでにになけなしになっていた理性が吹き飛んでいく。

狭山は左手で私の腕を掴み、右手で私の頬を撫でた。頬を撫でていた手はやがて後頭部に回る。

髪につけていたコサージュが揺れて、落ちた。

「んあ」

狭山の肉厚で熱い舌が口腔へと侵入してくる。思わず逃げようとした私の舌は彼の舌に絡めとら

れた。

舌の付け根を扱かれ、久しぶりの官能に身体が勝手に疼く。

「んっ、あ、はあ……」

「……ほら、舌をもっと出しなさい」

「んあ、っ」

思わず言われた通りに舌を突き出せば、狭山はいい子だというように目を細めながら私の舌を吸った。

口を閉じることができず、唾液が下へと滴り落ちていく。

口付けが、こんなに気持ちがいいなんて知らなかった。

私は狭山の腕に自分の腕を絡めて縋った。

「さ、やまあ」

知らずに甘い声が漏れる。

身体が熱くて逆上せそうさ。

「んっ、なんですか？ もっと欲しいんでしょう」

狭山はひどく楽しそうな声で言う。

私は目に涙を溜めながら彼を睨んだ。

私がどうしたいのかわかってるくせに、気づいてるくせに！

早く狭山の素肌に触れたかった。

なのに彼からは動いてくれない、キスばかり執拗しつぱうにしてくる。

狭山のキスは気持ちがいい。嫌なんかじゃない。嫌なんかじゃないけど、これじゃあ物足りないよ……

「ほら、お強請ねだりはちゃんと言葉にしないとわかりませんよ」

狭山は楽しそうに笑う。

「……っ、意地悪」

何よ……、こいつ意地悪だ。私から言わないと絶対にしてくれない気がする。

一瞬の逡巡しゅんじゆん。

けれど、傷つけられ空っぽになった心に、身体に、熱が欲しかった。

身体だけでも誰かに必要とされたい。一人ではないと教えてほしい。

そうでないと、全てが散り散りになって弾けて、消えてしまいうさだ。

ああ、なんで私はこんなに弱くてずるくて卑怯者ひきょうものなんだろう。狭山を利用して寂しさを埋めようなんて……

心の隅にある罪悪感。

後ろめたくて、目を閉じる。でもすぐにもう一度、視線を彼に向けた。

狭山は何を考えているのか、優しそうな笑みを浮かべて私を見ている。

先ほどまでの意地悪な笑みのほうがまだ耐えられた。

こんなふうに、大事なものを見るように見られたら、狭山に縋すがつてもいいんだと許された気になっってしまう。

私は狭山の首に両腕を回して抱きついた。

「が、まん、できないから……お願い……!!」

掠かすれる声で狭山の耳元に囁ささやきながら、身体を彼に擦りつける。

「まあ、今日はそれでいいでしょう」

何か足りなかったのか、彼は少し不満そうだった。

けれど、今の私にはこれが限界だ。

私の臀部でんぶに逞たくましい腕が回り、足が浮いた。

狭山は子どもを抱っこするように、私を軽々と抱きかかえる。

私は、標準体重より少し重めなのに。

自分の両腕を狭山の首に、両足を腰に巻きつけると、履いていたピンクのパンプスが足から落ちてカッンと音を立てた。

狭山は私をベッドに運ぶ。移動しながらも、ちゅっちゅつと音を立てて頬や唇に口付けをした。キスしづらくないのかなと思うけれど、私だってやめるつもりはない。

こんな心を揺さぶられる口付けを人生で何回体験できるだろうか。もしかしたらこれが最後の可能性だつてある。

それならば、少しでも長くこの甘い口付けを受けていたい。

蕩けるそれを酸欠になりかけるほど何度も繰り返した。

狭山は口付けに夢中になっていて、なかなか前に進まない。

時間をかけて私たちはダブルベッドにたどりついた。

狭山は名残惜しそうに唇を離しながら、そっと私をベッドに座らせた。そして自分はスーツのジャケットを脱ぐ。

「……っ、ふあ」

解放された唇から吐息が漏れる。

「まったく、そんな顔をして」

そんな顔つてどんな顔なのか、私にはわからない。

狭山の目に情欲が宿っている。

まるで彼から本当に愛されているように感じて、涙が出そうになった。

もちろんそれは私の思い込み。どうしようもなく自分勝手な勘違いだ。

きつと狭山は弱っている人をほうっておけないだけ。高校の時に泣いている私を無視できなくて声をかけたみたいに、今回も声をかけてくれた。

それでも今こうして、愛しげに頭を撫でる腕や、啄むように首筋を舐める舌は現実のものだ。

私は狭山の温もりに縋った。

狭山は息だけで笑い、上半身を屈めて「ずん」と私の首筋のにおいを嗅ぐ。そして、顎から首筋を往復するように何度もざらついた舌で舐めた。

「んっ、いや」

くすぐったくて、思わず彼の身体を軽く押し返す。

「余裕ですね」

狭山はそう呟いて、もう何度目になるかわからないキスをした。

「そんな、ことっ、んんっ……ないよ」

私が答えると、狭山は慣れた手つきで私のワンピースのファスナーを下ろす。

熱くなった身体が外気に触れ、ひんやりとして気持ちがいい。

その隙間から、狭山の手が入りこんできた。私は小さな声を上げる。

ブラのホックを外して、狭山は首筋から鎖骨、胸元へ舌を這わせた。

ぬるぬるとした舌が私の全てを知り尽くそうとするように丹念に舐めていく。

ワンピースの袖から腕を抜かれて、上半身裸にされた。性急に身体を押し倒される。

ほてった身体には、冷たいシャツが気持ちいい。

狭山は私に覆いかぶさりながら、掬うように胸に触れた。それだけで私の口から甘ったるい声が

漏れる。

「はあ、んっ」

「揉みがいのある胸ですね」

狭山が目を細めて言う。その嬉しそうな顔から私は目を逸らした。

「うるっ……、さい……」

胸が大きいのはコンプレックスだ。そんなこと言われても嬉しくなかった。

胸が大きいことでどれほど恥ずかしい思いをしたことか。

服だって袖や肩幅はちょうどいいのに胸だけ入らなかったり、ボタンが弾けて飛んでしまったり。拗ねる私を見て、ますます狭山は楽しそうだ。

彼から視線を外したお仕置きだともいうように胸の頂を甘噛みされる。

私はいつそう高い声を上げた。

「ひいっ！ ひゃ、い、きなりい」

甘噛みされた頂が、今度は舌先で舐られた。わざと音を立てているのか、胸を吸う音がやけに大きく響く。

「はあ、ああっ……」

狭山は乳輪をなぞるように舐めてから、緩急をつけて頂を舐り、また甘噛みした。もう片方の胸も、指の腹でこりこりと捏ねられる。

胸を弄られただけで達しそうになるぐらい快感を感じ、腰がびくびくと動いた。

最後に胸を押し潰すように舐めてから、狭山の唇が離れた。

私の胸は彼の唾液でぬるぬるになっている。

そこに突然息を吹きかけられた。ひんやりした快感に「ひん」と声を出してしまう。

両胸の頂を指の腹でぐりぐりと弄りながら、再び胸の間に狭山が顔を埋めた。そして胸の周りに口付けを落とす。

時折ピリつとした痛みがあるが、それすら快楽に変わる。

喘ぎ声を上げながら、私は狭山がくれる快感を受け取った。

あまりに強い快感になぜか恐怖を感じる。

「も、いやあ……！ ひああ」

逃げようとして身体をずらしかけるが、狭山が全身で押し掛かり阻んだ。

痛くはないが、少し重い。

彼の重さを心地良いと感じている。それが妙に悔しかった。

その間も狭山は胸を弄り続けている。さらに首筋や顎にちゅつと口付け、唇の角度を変えながら啄む。

「いや、じゃないでしょ。ほら、ちゃんといいて言いなさい」

「んああ、やあ」

悦楽に溺れる自分が情けなくて、いやいやと首を横に振った。
今までこんなふうに感じたことはない。

身体がどんどん狭山に作り変えられていつている気がして怖い。
まだ胸しか弄られていないのに、全身が溶けきっているようだ。

「まったく、しかたのない人ですね」

私が翻弄されているのが楽しいらしく、狭山は耳元でそう囁くと耳朶を舌で舐めた。生温かい舌が耳の穴をゆつくり行き来する感覚に身体が震えた。

「ひい、や、耳いやあ」

「耳が弱いんですね。ああ、耳もでしたね。貴女の身体はどこも敏感ですから」

そう言つて狭山は恍惚とした表情を浮かべた。

私はふと、狭山がまだシャツを着たままだということに気づいた。

彼の胸をぐつと両手で押すと、狭山は身体を起こす。

そして「どうした？」という顔をしながら緩く首を傾けた。

それが心を許した恋人に見せる仕草みたいに感じて、私の心は温かくなる。たったそれだけで私の心の隙間が埋まっていくような気がした。

そつと狭山のシャツに触れて、ボタンを一つ一つ外していく。

するとぐつぐつした指が私の顎をとらえて、キスをしてきた。

「んー……」

「ほら、はやく脱がせてください」

私がボタンに手をかけると、狭山はまたキスをしかけてくる。

そのたびに私の手は止まってしまった。

「うご、んっ、か、ないで」

邪魔をしているのは狭山なのに、彼はにやにやと笑いながら「はやく」と再び私を急かす。
手伝ってくれてもいいのにと軽く睨んだら、さらに深いキスをされた。

舌先が触れ合い、じゅるつと淫らな音が響く。口蓋や頬裏を丹念に舐められて、また脳が蕩けてしまいそうだと思った。

酸欠になりながらもなんとかボタンを全て外し終える。

目の前に現れた胸板にそつと触れた。思っていた通りの綺麗な筋肉がついた逞しい身体。

細すぎるわけでも、筋肉がつきすぎているわけでもない。ギリシア彫刻のような体軀に胸がときめく。

「どうしました？」

まじまじと見ている私を訝しく思ったのか、狭山が不思議そうに聞いてくる。

私は黙つて胸板に口付けした。

「ん、ちゅ」

何度もキスをしながら、シャツを羽織ったままの狭山から服をはぎとった。

現れた裸の上半身を抱き締め素肌と素肌をくっつけながら、浮き彫りになった鎖骨に舌を這わせる。

「はあ……今度は、貴女が楽しませてくれるんですね」

小さな吐息と笑い声が頭上から降ってきた。

彼の声に応えるように鎖骨から胸、そして膺へ舌を這わせる。私は次第に大胆になり、痕をつけるように強く吸った。

狭山はその行為を止めようとはせずに、私の頭を撫でる。

痕をつけても怒らないということは、今彼に特定の相手はいないのかもしれない。もし彼女や、そういう関係の人がいれば痕はつけさせないだろう。

まあ、狭山のような真面目そうなタイプが浮気をするなんてありえないと思っっているけれど……酔っているからといって、私だって相手がいる人に縋ったりしたくない。

「上手ですね。いいですよ」

狭山の声が掠れていて、彼も感じていることがよくわかった。

私も乱されたのだから、狭山ももっと乱れればいい。もっと感じて、私のことしか考えられないぐらいになればいいのに。

ただ舐めているだけで、自分の奥から蜜が溢れてきているのを感じた。

そつと狭山のそれを見つめると、脱がなくてもわかるぐらいに大きくなっている。そこに手を添えて撫でた。

狭山が私に欲情していると思うと喜びが湧き上がり、背中をぞわぞわとした快感が駆ける。

「まだ、ですよ」

早く欲しいって訴えたのに、狭山は私の手を掴んだ。

そして形勢逆転というふうにな私をシーツの上に押し倒して、覆いかぶさる。

狭山のきつちり整った髪が崩れ始めていて、艶かしい。

狭山の手が私の太ももをなぞった。大きい手の感触が熱くて気持ちいい。

「はあ……」

ただ撫でられただけで息が上がってしまう。

狭山を見上げると、彼は私から視線を外さず舌舐めずりをした。

無意識であろう狭山の仕草に色気を感じ、私の息が止まる。

その隙に狭山は私のワンピースを完全に脱がし、さらにストッキングを脱がした。

下着の上から秘所を撫でられ、我慢しきれず声が零れる。

「ひいああ」

「ああ、もうこんなに濡れていますね。凄い音がしますよ」

ゆつくりと念入りにそこを擦られて、焦らされる。

すでに下着はぐつしよりと濡れていて、狭山が撫でるたびにぐちゅぐちゅと音がした。気持ち良さと、もっと欲しいという欲望で腰が動く。我慢できない。

「んあ、はあ、ああ」

自分でもおかしいと思うくらい感じていた。

元彼としての時に、こんなに濡れたこともこんなに快楽に溺れたこともなかった。頭がおかしくなりそうなほど気持ちいいと感じたこともない。

突然下着がずらされ、ぬぶつと指を挿入された。

意識を他にやっていた私は驚いて、嬌声を上げる。

「あああああ」

「軽くイキましたね」

狭山は笑いながら言った。そして、中を確かめるように指を動かす。

「ひ、んんあ。あつ、あああ」

男らしい指で膣壁をぐにぐにと擦られると、身体の奥が甘く疼く。

イッてしまったばかりだというのに、息を整える暇もない。さらに強い刺激を与えられ、翻弄され始めた。

ぞわぞわと背中に甘い痺れが駆け上がり、私は逆上せた頭を何度も振る。それなのに狭山の行為はただただ激しさを増す。

「俺と居るのに、他の男のことを考えていませんでしたか？ お仕置きですよ」

そう言つて狭山は、一本だった指を二本に増やし媚肉を広げた。私の奥からとろとろになった蜜が溢れ出てくる。

「ひうつ、も、やあつ、激し……っ」

「これぐらい、激しいうちに入りませんよ」

狭山は色気を含んだ笑みを浮かべる。

これが激しくないのなら、彼にとつての激しい行為とはどういうものなのか。

息も絶え絶えに、私はただひたすら愛撫を受けた。

狭山は指を動かしながら、もう片方の手で充血した花芯を軽く押し潰す。

身体がびくりと動いて、頭が真っ白になりそうな快感が襲う。

狭山の愛撫は止まることを知らない。

私は足先でシーツを搔いて、迫り上がってくる甘い疼きから逃れようとした。

「んあああ、あつ、だ、め、今だめえ」

「嘘つきですね。気持ちが良くて蕩けそうな目をしているくせに」

“そんなことない”と訴えるように両手で自分の顔を覆う。けれど、優しく膣壁を擦られているだけで頭が焼き切れそうだ。

「んんっ、ふああ」

声を堪えようと下唇を囁むが、それでも喘ぎ声は漏れていくばかり。

「一度、イキましようか」

「ええ？」

狭山がいったい何を言っているのかわからなくて、自分の顔を覆っていた手を外した。目に映った彼は楽しそうに笑っている。

その笑みの意味を理解した時には、花芯をぐりぐりと押し潰されていた。思わず逃げようとしたが、さらに激しく指を動かされて、腰に力が入らない。

「貴女は優しくするより、少し強いぐらいのほうがいいですね。愛撫のしがいがありますよ」

彼は、強請るように膨らんだ花芯をぐりぐり押し潰し、指で摘まんで何度も抜く。

私は頭を振りながら、柔らかいシーツをぎゅうっと握り締めた。

「ひっ、や、ああ、ああああっ」

背中を弓なりに反らし、一際高い嬌声を上げて達する。頭が真っ白になって、身体はぐったりとベッドに沈んだ。

荒い息を繰り返しながら、ぼんやりと狭山の顔を見た。

「イッたみたいですわね。可愛い声を上げて、そんなに気持ちが良いかったですか？」

狭山の声は笑っているが、瞳の奥にはまだ冷めていない欲望がある。

イッたのは私だけで、彼はまだなんだから当たり前だ。

私の蜜でどろどろになった指が引き抜かれ、じゅぷつと卑猥な音が零れた。

狭山は私に見せつけるように、自分の指についた蜜を舐めとる。

それを見て達したばかりのそこがまた疼き出した。けれど身体は倦怠感で動かない。

狭山は一度私から離れた。

今まで感じていた熱さが急に失われて、少し肌寒い。

視界から外れた場所でガチャッとベルトが床に落ちる音が聞こえる。

続いて、ガサガサというビニールの音と袋を破く音がした。

ベッドに戻って来た狭山は、私の両足をかかえ込みながら覆いかぶさってきた。濡れそぼった蜜

口に、欲望で昂ぶったものを主張するようにゆるゆると擦りつける。

「はっ、ああ……っ」

「ひくついていますわね。挿れて欲しいですか？」

熱い息を吐きながらそんなことを言う狭山を見つめる。

この状況で、挿れて欲しくないと言葉にできる女性がどれだけ居るのか。

どこかには居るかもしれないが、私には無理だ。

これ以上焦らさないでほしい。

蕩けたそこに屹立した熱い肉茎を擦りつけられると、身体の疼きが激しくなる。

それに、早く狭山に私を感じてほしかった。

彼はどんな声を出し、どんな顔をするんだろう。

乱れる狭山の姿が見たい。

「は、やく……！ 挿れ、てよ」

息を短く吐きながら涙目で言葉にすると、彼は蕩けるような笑みを浮かべた。

この人はこんなふうにも笑うんだ。

その笑顔を見たら私の心まで温かくなって、つられるように笑った。

狭山は秘所の入口に硬い先端を押し当てて、ゆっくりと膣壁を押し広げる。

久しぶりに受け入れたからなのか、引つ張られるような感覚がして、苦しい。

「はあ、キツ、いですね」

艶っぽい声で狭山が呻く。

私は口を開くが言葉にならず、ただ息を吐いた。余裕がなくて苦しいのに、なぜかその熱い肉茎は身体に馴染む。

甘い喘ぎ声が漏れた。

「あああつ、くう……、あああ」

こんなに声を出し続けたら、きつと喉を痛めてしまう。

狭山は私の腰を掴み、奥に奥にと押し進んだ。そして彼の腰が私の素肌にぴったりとくつつく。

「ああ、奥まで入りましたね。わかりますか」

「や、ああつ……くる、しい……」

圧迫感で痛いぐらいに苦しい。

けれど、それが嫌だとは思わなかった。

愛液が滴り滑りやすくなっているそこに、じゅぷつと淫猥な音を出しながら肉茎が抽挿される。

その動きにあわせて甘い声が出た。

狭山は自分の形を私に覚えさせるかのように緩慢に動く。そして最奥を穿つたびに私の腰を揺すった。

耳元で狭山の掠れた息が響くと、無意識に肉茎を締めつけてしまう。

彼の息遣いはますます色気を帯び、私の頭の中を侵食していく。

膣壁を擦る熱に煽られ、私は思わず狭山の背中に手を回した。素肌と素肌がさらに密着する。

彼が動くたびに敏感な部分が刺激され、いっそう身体がほてった。

そのあまりの快楽に、狭山の背に縋った腕に力が入り、私の爪が狭山の背中にくいこんだ。

「つつ……」

狭山は眉間に皺を寄せ、小さな声を上げる。

「あつ、……ご、ごめつ……、んっ!?」

とっさに謝罪したけれど、狭山は最後まで言わせてくれず、私の唇を塞ぐ。貪るように何度も唇

を吸い、少し空いた隙間からにゆるつと舌が侵入してきた。

唾液を交換するような深い口付けを、飽きることなく続ける。

その間も抽挿は繰り返され、ねっとりとした粘着質な音が響く。

「はあっ、だめ、もうっ、だめえ」

首を振って口付けからは逃れたものの、膣内には肉茎が挿入されたままだ。擦られると泣きたくなるぐらいの悦楽が湧き上がる。

「またイクんですね。いいですよ、イッてください」

艶やかな声で囁きながら、狭山はさらに激しく動いた。

ぐじゅぐじゅと厭らしい水音とベッドの軋む音が私を絶頂へ導く。

勢いよく奥まで打ち込まれた瞬間、今まで感じたことがない愉悅が私を呑み込んだ。

「いや、や、やつ、ああ、ああああああっ……！」

絶頂に達する瞬間、彼の背中にまた爪を立ててしまった。

狭山の腰に両足を思いきり絡ませて強く強く抱きつく。膣内を蠢く太い楔を締めつけてしまったせいか、狭山の顔が少し歪んだ。

私はびくびくと身体を痙攣させた後、ぐつたりと両手と両足をシートへ投げ出す。

少し休みたいたいと思っただけ、中を圧迫しているものはまだ硬度を保ったままだった。

「ひっ、待って……！ ちょっと、待ってえ」

「無理ですね」

せめて息が整うまで待つて欲しかったのに、却下される。

私のためだった愛撫が、今度は狭山自身の欲望を解放するための動きに変化した。

私の中のそれはさらに質量を増す。

敏感な身体はまた絶頂へ連れていかれる。

「んはあ、ん」

しつこく唇を啄まれて、酸欠になるほど口内を舐られる。唾液が頬を伝うのも構わず、狭山の腰の動きは激しいまま。

「くっ……！」

私の身体を抱き締めている狭山の重さを、今さらながら感じる。

質量が増したそれが限界に達した瞬間、狭山は身体を強張らせた。

「は、……あ……」

狭山が爆ぜてすぐに私も絶頂を迎える。

狭山は達した後もマーキングするように膣内を擦っていたけれど、私はもう意識を保ってはいられなかった。

暗闇の中で私が泣いている。

何も持っていない、何もない、私に価値はないと喚（わめ）いている。

寒さで震えていた身体がふいに温かくなった。

重たい瞼（まぶた）を開けた時、身体にまとりついていた温（ぬく）もりの正体が目に入る。

視線をゆっくり動かすと、狭山の寝顔が視界に入った。

「……っ」

驚いて息を呑んだ。

そうだ、昨日の夜……

朝近くまで狭山としていたことを思い出して頭をかかえる。狭山が起きないように注意して上半身を起こし、悶（もた）えた。

コレはひどい……！　なんて醜態（しゅうたい）を晒（さら）したんだ私は！　穴があつたら入りたい。

いくら酔った勢いとはいえ、同窓生とこんな関係になるなんて。

私に巻きついていていた狭山の腕を見ながら小さくため息をついた。

男らしい腕、この腕に守られる女性は幸せだろうな。

逡巡（しゆんじゆん）してからそっと狭山の頬を撫（な）でて、ベッドから降りた。床に落とされたワンピースや下着を取りシャワー室へ向かう。

久しぶりだったから、腰や足が痛い。けれど心は温かかった。

汗を流そうとシャワーを浴び、髪の毛を乾かしてから洗面所を出た。

ベッドのほうに視線を向けると、まだ狭山は寝ている。

顔を合わせるのには恥ずかしかったので、そのほうが都合がいい。

椅子に座ってスマホで時間を見ると、朝の八時。チェックアウトは十時のはずだから狭山は寝かせておいたままでも大丈夫だろう。

手早く化粧をする。

ふと地面に落ちているビニール袋が目に入った。

中には避妊具の箱が入っている。

そこで昨夜ホテルに来る前に狭山がコンビニに寄っていたことを思い出した。

私は狭山が眠るベッドに腰を下ろして、彼の乱れた髪を撫（な）でる。

「あどけない顔……」

この人は眠るとこんなにあどけない顔になるんだ。起きている時は、切れ長の目のせいかな、冷たい印象を受けるのに……

これは限られた人しか知らない顔だろう。

そう思うとくすぐったい気持ちになった。

狭山の前髪をかきわけて、額に唇を落とす。

「ありがとう」

こんなバカな女に優しくしてくれて——小さな声でそう呟（つぶや）いた。

ホテルに備え付けられたメモ帳に、ボールペンでメッセージを残す。財布の中からお金を出して、机に置いた。

肩に鞆をかけて、最後にもう一度狭山を見てそっと部屋を出る。
メモに残したのはたった二言。

ごめんね、ありがとう――

第二章

同窓会から数日経った九月初旬。

明日からは新しい会社での仕事が始まる。

翌日の支度を終えて、私は一息つくために珈琲コーヒーを淹いれた。

インスタントなので香りは控えめだが、手軽だしそれなりに美味おいしいので重宝している。
明日のことを思うと緊張してくる。

シンプルなおフィスカジュアルスタイルの服はアイロンをかけて吊るしてあるし、鞆に必要なものも入れた。

朝起きて朝食をとり、出勤するだけという状態になっている。

……なつてはいるが、どうも心配になり、忘れ物がないか何度も確認してしまう。
そんなことばかりやっていて疲れてしまった。

今日は早めに寝よう。

珈琲コーヒーを飲み終えて歯をみがき、ベッドに入った。

目覚ましをセットして布団に潜もぐり、瞼まぶたを閉じる。

ふと狭山のことを思い出した。

共通の友達はいない。お互いの連絡先も知らない。

同窓会に行かなければ二度と会うことはないだろう。

それを寂しいと思うのは間違っている。これ以上、迷惑をかけるわけにはいかない。

一晩だけの優しさでも、私は十分元気をもらったのだ。

明日から頑張ろうと思いつつ、私は眠りに落ちていった。

翌朝――

駅から徒歩十五分ほどの高層ビルの一室で、私は大勢の人間の視線を浴びている。

「この度、総務部に配属となりました熊谷利音と申します。はじめのうちは皆様にご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いいたします」

頭を下げると、拍手で迎えられた。部長の「みんなよろしく頼むよ」という声を合図に、みんなそれぞれの業務へと戻っていく。

緊張する場面が終わり、誰にも気づかれないようにホッと息をついた。

部長が私に業務を教えてくださいと女性を紹介してくれる。

彼女は私を部屋の角の席に案内した。

「席は此処こゝを使って、この書類をデータベースに入力していただけます。わからないことがあれ

ば、聞いてくださいね。これがマニュアルです」

手作りと思われるマニュアルを手渡される。お礼を言つてさつそく指示された通りに入力をはじめた。マニュアルはともわかりやすく、私は順調に業務をこなしていく。

最初は集中していたものの、しばらくして隣の席の女性がこちらを見ていることに気づいた。

「ねえ、なんでウチの会社に入ったの？」

私と目が合うと、彼女は小さな声で聞いてきた。

「知り合いに紹介してもらって」

「へえ、そうなんだ」

隣の彼女は、さほど興味が湧かなかったのか、それ以上深くはつっこんでこなかった。

実は私にこの会社を紹介してくれたのは、この会長である柴崎しばさきさんなのだ。私が前の会社で働いていた頃知り合ったのだけれど、彼にはまるで娘や孫のように可愛がつもらっている。

その縁で私が勢いで辞表を出したことを知った柴崎会長が、ならうちで働かないかと言ってくださったのだ。

もちろん、そんなずうずうしいこと、最初は断った。だけど、このご時世、なかなか再就職先が決まらない。私はそんなに余裕のある暮らしをしているわけでもなかった。結局、柴崎会長のご厚意に甘えてしまったのだ。

だから中途半端な仕事をして、会長の顔に泥を塗るなんてことしたくない。

私は気合を入れて、データ入力を再開した。

黙々と入力をこなしていると、お昼の時間になり、オフィスがざわめき始めた。席を立つ人がちらほらと出てくる。

私が辺りを見てみると、それに気づいた指導係の女性が声をかけてくれた。

「熊谷さん、キリのいいところまで終わったらお昼にしていいいからね」

「わかりました」

この部署では、お昼の時間が決まっていて、全員が同じ時間にお昼をとるそうさ。

区切りのいいところまで終わらせて、ぐつと身体を伸ばす。

お昼をどうしようかと考えていると、先ほどの隣の席の女性に話しかけられた。

「ねえ、熊谷さん」

「はい」

「お昼は、お弁当を持ってきてるの？」

「いいえ。何か買ってきてて此処で食べるか外に食べに行こうかと思っています」

私の言葉を聞いて、彼女はにっこり笑った。

仕事中に話しかけられた時もあったが、綺麗な人だ。座っていてもわかるメリハリボディに、色気のある口元。

私は彼女に見惚れてしまう。

「そう、ならランチ一緒にしない？」

彼女は身体をこちらに乗り出して、私を誘った。少し悩んだものの、せっかく誘ってくれたのだから断るのも申しわけない。

「私でよければ」

そう答えて財布を持って席を立った。

その時、彼女の名前を聞いていないことに気がついた。

名前を尋ねるタイミングを掴めないまま、彼女のおすすめだという北歐テイストの可愛いカフェに連れて行かれる。

席について、水を一口飲んだところで彼女は自己紹介してくれた。

「私は宮守由香里。今の部署での仕事は今年で二年目、その前は人事部にいたの。よろしくね」

一気にそう言うと、メニューを広げて見せてくれる。

「熊谷さん何食べる？ おすすめはパスタかな」

「あ、じゃあ本日のパスタにします」

本日のパスタはカルボナーラだった。スープとサラダ、それに食後のドリンクもついて九百円。

宮守さんは、豆の入ったタコライスをチョイスした。

会社の話などをぼちぼちしながら、食事を終える。食後の珈琲を飲んでみると、宮守さんが口を

開いた。

「熊谷さんって年いくつ？」

「二十八ですけど」

「あ、やっぱり同じ年！」

彼女は私と同じ年だと知ると屈託なく笑う。

「なんとなく同じ年くらいかなーって思っていたんだよ。年が近い人、今の部署にいないんだよねー、ちよつと肩身が狭いなって思ってたから嬉しい」

楽しそうに言う宮守さんは本当に美しい。

「たしかにあそこの部署は、新人かベテラン、どちらかの方が多くですよね」

破壊力のある美人の笑顔に見とれながら私は同意した。

「そうなの。だから仲良くしてね。呼び方も宮守さんじゃなくて、由香里でいいよ」

宮守さんはそう言うが、私は本日入社の人だ。最初くらいは丁寧な言葉遣いで話すべきだろう——と思っていたのだけれど、宮守さんは気さくな人で、彼女につられて結局フランクな話し方になってしまった。

「それじゃあ遠慮なく由香里って呼ぶね」

私が言うと、由香里も嬉しそうに笑った。

彼女とは馬が合いそうだ。時期はずれに一人で入社した私は、友人ができそうでホッとした。

ランチを終えて会社へ戻ったけれど、まだ昼休みの終了まで少し時間がある。そこで由香里に社内を軽く案内してもらった。

総務部の近くの給湯室についても説明してもらう。説明といっても、珈琲や紅茶の置き場や使い方など。基本的に自分のマグカップは各自で管理していて、給湯室に置いてあるものは来客用だそうだ。

由香里と話していると、他の部署の若い女性社員が二人、給湯室に入ってきた。

「あ、宮守さんお疲れ様ですー」

「ええ、お疲れ様」

由香里に挨拶をした後、私の存在に気づいた女性社員は愛想良く話しかけてくる。

「初めてお会いする方ですよ。今日から入社した方ですかー？」

「はい、よろしくお願いします」

そう言っただけで頭を下げた後、女性社員たちは自分の飲みものを持って給湯室を出て行こうとした。けれど、出口付近で一際高い声を上げる。

「あ、ねえ！ 営業部の主任だよー」

二人とも出口で足を止め、廊下を見ている。

「本当だ！ 相変わらず格好良いー」